狂った少女はただ笑う

真田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狂った少女はただ笑う

【Ｎコード】
Ｎ２７２６Ｚ

【作者名】
真田

【あらすじ】
執行者　ＮＯ１４　≪表裏比興≫
そんな肩書きを持つ執行者の少女。リア。そんな少女が魔都クロスベルにやってくる。
理由、それは…
「里帰りだけど、何か問題でも？」

元執行者のオリ主はそれなりにいるけど現役の執行者はあんま見ないなぁ…自分が知らないだけかもしれないけど。なんてふと思い書いてみた二次創作です。興味のある人はぜひともクリック！

プロローグ　夢の話（前書き）

どうも初めまして！そうでない人はこんにちは。真田です。

まず最初に。

　これは前から連載してる小説で「ネタが思いつかねえええええええ！！！！！」ってな感じになった時に、ちょくちょく書いていたものです。

そろそろたまり過ぎて数がやばくなり、執筆中小説内から必要なデータをサルベージするのがきつくなってきた＆このまま眠らせるのもなぁ…と思い投稿したものです。

　故にしばらくは安定した更新ができますが、ストックが切れれば恐ろしいぐらいに不定期となるかもしれません。

　それでもいいという方はどうぞ！感想を頂けると嬉しいです。

プロローグ　夢の話

最初に言っておくわ。これは夢の話。ほとんど毎晩見ている夢の話。

とっても大きな赤い水たまりがあるのよ

それをなめてみると鉄っぽい味がする。

それでこれは水じゃなくて血なんだって気づくの。

私はそれに驚いて近くに何があるのかを見渡してみる。

そしたら、血溜りの中心に一人の女性の死体が転がってて、私はそれに近づいていくの。

そして、近くで顔を見るとそれがお姉ちゃんなんだってことに気づく。

それがわかって泣きそうになってると、いつの間にか私は一本の長剣を片手に立ってるの。

その長剣からは血が滴り落ちていて、それに気づいた私は剣の剣腹をじっと見つめる。そこに自分の顔が写る。

その顔や髪にはたくさんの返り血が付着してて、とっても汚らわしい。

それを見てから初めて私は周りを見渡す。

そこにはさっきのお姉ちゃんの死体はどこにもなくて、代わりにたくさんの死体が転がってるの。

そこで、私が殺したことを思い出す。そして、死体のうちの一つが言うの。

コノ、ウラギリモノガ…

そして、何かが壊れたような音が響く

は……は……は……あはは……
…は……は…は…は……ああ……は……
……あはは……
……はは……
……はは……
…はは……
…アハハ…

笑う。

アハハハハハハハハハハハハハハハハハ

狂う（わらう）

アハハハハハハハハハハハ!!!!!!アハハハッハハハハハハハハハッハハハハッハハハハハッハハッッハハハハハハッ、ハハッハハハハハッハハッハハハハハハハハハ、アハ、ハ、ア、ハハハハハハハハハハハハハハアハハハ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ、アハ、ハハ、ハハハ、ハ、ハハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハハ、ハ、ハ、ハハ、ハ、ハハハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハハハハハハハハ!!!!!!!ア、ハハハハハハハハハハアハハハッハハハハハハハハハッハ、ハハハッハハハハハッハハッッハハハハハハッハハッハハハハハッハハッハハハハハハハハハ、アハ、ハ、ア、ハハハハハハハハハハハハハハハアハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ、アハ、ハハ、ハハハ、ハ、ハハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハハ、ハ、ハハハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハハハハハハハハハ!!!!!!!

第一話　結構明るめな話

「すっげ…さすがクロスベル…」

そう驚きの表情を浮かべたのはどこか浮世離れした一人の少女。真っ白な髪を腰のあたりにまで伸ばし、赤色の目をしていて、顔も十人中九人は可愛いと思うんじゃないかな？ってなぐらいに可愛い容姿をしている。服装は真っ白な着物のような袖の長い服で、帯の部分は鮮やかな赤色。下は赤のミニスカにピンクのニーソックスという和風か洋風かどっちかにしたら？と言いたくなる服装だった。あ、ならない？そうでしたかすいません。

それはともあれ、その少女はあたりをもの珍しそうにきょろきょろと見回していた。例えるなら田舎から上京してきた田舎者だ。そしてそれは別に全部が間違いというわけでもない。

時刻はまだ昼ということもあり、そこはまさに都会といった感じの人通りの多さだった。高いビルがいくつも鎮座しており、目の前を横切って行くたくさんの人。しかもたまに導力車も通って行く。

「導力車って初めて見た…」

そんなことに軽く感動を覚える。昔と随分変わったなぁ…と寂しさ半分物珍しさ半分といった心情だった。子供のころはここらへんに住んでいたのだが、ちょっとした一軒でアルテリア法国に引っ越しているのでざっと八年ぶりとかそのぐらいだったはず。

そしてその少女は初のクロスベルの景色を十分に堪能してから、これからすべきことを思い出す。

「大きな鐘の前とか言ってたっけ…」

まず、彼女はしばらくここで生活するつもりでいた。そのためにはまず家をどうにかしなければなるまい。残念ながら昔住んでいた家などは当に売り払ってしまっている。さすがに好んでホームレス生活をしたいなどとは思わない。

そこで彼女の所属している組織…ぶっちゃけると「結社」なのだが、あの中では一番話の合うカンパネルラが何らかの便宜を図ってくれたらしく現地で案内してくれる人間を紹介してくれるとのことだ。 カンパネルラが見せた好意に正直『熱でもあるんじゃないか？』『実はドッペルゲンガーだったりするのじゃないだろうか？』などと思いつつも、人からの行為をわざわざ無下にする気にもならなかったので、とりあえずお願いしておいた。実際にドッペルゲンガーかと聞いてみたら「心外だなぁ」とか言いながら割ってた。

そしてその待ち合わせ場所がここであるのだが…

「…あの人かな？」

その中央に鎮座している、大きな鐘の前のベンチで座っている青年を発見する。…そして彼女は深呼吸をした。なにせあの時紹介してくれたのはカンパネルラだ。絶対普通の人間ではない。あるはずがない。絶対に面白がって何かを仕掛けたに決まっている。星杯騎士団の守護騎士なんて可能性なんかは濃厚である。

ここで考えていても仕方がないと思い、声をかけようとしたが先に青年のほうが気づき声をかけてくる。

「こんにちわ。クロスベル警察の者ですが…」

なんで警察？カンパネルラはいったい何をした？なんかの犯罪の濡れ衣かぶせられた？

「貴方が支援要請を出されたリア・ルアルディさんでしょうか？確かクロスベルの案内をしてほしいという内容でしたが」
「えーと…ちょい待ち」

支援要請…？
と少女…リアは幼いころより教え込まれた知識やら、生まれつき持っている頭の回転の速さを回転させ…納得した。
たぶんこの人が友人の紹介したという案内人というのであっているのだろう。用意したというか警察に頼んだ…なんで警察なのかという疑問は置いておこう。カンパネルラの考えることはわからないし。しかも今のところ裏もなさそう…

え…？

…何もなさそう…だと…

明日は嵐だ…今日中に住むとこ決めないといけないようだ…

「どうかしましたか？」
「あーいや、何でもない。ちょっとぼーっとしてて…改めまして。私が依頼を出したリア・ルアルディ。今回はよろしく」

リアはどこか気の抜けたようなへらへらとした笑みを浮かべる。

「ご丁寧にどうも。クロスベル警察特務支援課。ロイド・バニングスです」
「あ、別に敬語じゃなくて結構いいわよ？同い年ぐらいだろうし」
「いえ…さすがに仕事ですし…」
「私は気にしないからさ」

というと、ロイドといった青年は少し表情を和らげて言った。

「君がそういうのなら…短い間だけどよろしく」

「ん、こちらこそ…さっそく案内してくれるかな？まずは家を探したいから」

「家を探すって…どこか親戚の家に泊まるとかじゃないのか？」

「違うわよ？一人暮らしになるわね」

「そうなのか…」

ふーんという表情をしつつ、ロイドはリアと視線を合わせる。

「それじゃあ、行こうか。家ならまずは行政区に行って空き家のカタログをもらってきた方がいいと思うけど…」

「そこらへんはお任せするわ。あ、でも余裕があったらこの町の見どころの案内もお願いしていい？それと家はなるべく安いところがいい」

「はは……了解」

「へぇ…普段は四人なんだ」
「そうなるかな。今日は全員で行動するよりもこっちの方が効率が良かったから別行動だけどね」

そんな雑談をしながら今は東通りに来ていた。行政区で空き家のカタログをいくつかもらってきたのでそれをもとに家を周りながらクロスベルの案内をしてもらっている。

「露店とか多いのね」
「結構新鮮な野菜とかが手に入るから結構繁盛してる。あ、あとそこが遊撃士協会になるかな」

と、ロイドが指さした方向の看板には確かに遊撃士協会と書かれていた。あ、そういえば…

「ヨシュエスが今ここに来てるんだっけ？」
「ヨシュエス…？ああ、ヨシュアとエステルの事か？」
「うん、そんなとこ」

ロイドが何か聞きたげにしていたが、それよりも露店に面白そう

なものを見つけたので、そちらに足を進める。
「にがトマト…だと…なんていうものを出荷しているんだリベール…と、こっちは共和国の…」
にがトマトとはその名の通りリベール産のものすごくにがいトマトの事だ。あれで作ったジュースをよく罰ゲームと称して飲まされたなぁ…ちょっとトラウマを刺激された…あ、でもちょっと懐かしいしな…どうしようか…
「へぇ…そういうのって結構詳しいのか？」
「ま、いろんなところ行ってきたからそれなりにいろんなことは知ってるわよ？帝国のおいしい料理とか、共和国のおすすめの観光場所とか…あ、面白そうなのでいえば『銀』のファンタスジックな噂も聞いたことあるわね」
と、にがトマトを置いている店の前で立ち止まりながら何気なくつぶやいた瞬間。ロイドの顔色が変わった。
「『銀』の事を知ってるのか！？」
「知ってるというか…共和国の人間なら誰もが……ってほどじゃないけどそこそこ有名な話よ？伝説の凶手なんて呼ばれてる。それがどうしたの？」
そういうとロイドは数秒だけ考えこんでから少し口を濁してから言った。
「…ちょっと警察の方で追ってる事件に銀が関係してるかもしれないんだ。それでその『銀』の情報が欲しくて、情報を集めてるところでさ。よかったら聞かせてくれないか？」

「へぇ…どんな事件なの？」
「…そういうことは守秘義務があるから言えないんだ。すまない」
そんな警察の立場としての言葉に、リアは別にそこまで興味があったわけでもなかったので特に追及する気もなく、にがトマトを手に取りながら言った。
「ふーん…ま、いいわ。といっても私も大したことは知らなくてのよね。私の知ってることと言えば『銀』って言うのは伝説の凶手…まぁ暗殺者とか刺客とかそんな感じの人の事。その人は何世紀もの時を生きて暗器や札を駆使して狙った獲物は確実に葬る…とかいうの私の聞いた話ね」
「何世紀って…眉唾物じゃないか？」
ロイドが聞くとリアはにがトマトの購入を本気で検討している様子でありながらも質問に答える。
「そうでもないわよ。知り合いにちょっと裏社会関係の人がいて、その人曰く『銀』って人に依頼を頼めばほぼ確実に依頼を完遂してくれるらしいし」
「…え…」
あっさりと裏社会というセリフが出てくるととは思っていなかったのかロイドの顔が微妙にひきつっている。やがて戸惑い気味に問いかける。
「その人とは…その…大丈夫なのか？」
「いい人よ。それと銀の事だけど…何千年生きてるとかってのはなんかカラクリがあるんでしょ。まぁ、『銀』は本当に何千年も生きる化け物だった！！みたいな展開があったりするかもしれないけど」

「いや、そんなに生きられないだろ」
苦笑しながらロイドが言うとリアはふざけた様子もなく真顔で答える。
「そう思う？でも世の中って不思議で満ち溢れてると思うわよ。常識で考えられない事って結構多いんだから」
　実際にカンパネルラって全然年取ってるように見えないし。あれも不思議だよなぁ…と心中で呟きつつ。やっぱり怖いもの見たさ的な感じで買っておこうということでにがトマトの購入を決定し、気のよさそうなお兄さんにミラを支払う。
「それと『銀』が最近は黒船とか言うマフィアに雇われてクロスベル入りしたみたいだけど…さ、次行こ」
「君はいったい何者なんだ…」
「ふふ。そこは秘密。ミステリアスな女性に男性は引かれるってね」
「そ、そうか…」
「ま、冗談はさておき…次は旧市街ってところに行ってみたいな。あそこのマンションが格安じゃなかったけ？」
とロイドに聞きながらさっそくにがトマトをかじってみる。……くおおおぉぉぉ…や、やっぱり苦い…
「吐きそう…」
「…大丈夫…か？」
「あんまし…好奇心は猫をも殺すとはこのこと…」
　もうこれ買わない。と心に誓いつつ、2、3回深呼吸をして何とか持ち直す。と、さりげなくロイドがジュースを差し出してくれた

のでそれを一気飲みし口直し。

「ふぅ…ありがと」

「どういたしまして。というかそんなに苦いのか？」

「食べてみる？」

と、まだ一口しか食べていない…というかこれ以上食べたくないにがトマトを差し出す…いや押し付ける。いやもう代わりに食べてくださいお願いします。

「それじゃあ、一口だけ…」

と言ってロイドも怖いもの見たさなのかパクリと一口。と、そこで今更ながらリアは気づいた。そしてちょっといたずらっぽい笑顔を浮かべ、わざとらしく呟いてみる。

「これって関節キス…？」

「〜〜〜――――！？」

のどに詰まった！？

「あ、ちょっ…大丈夫！？そこのお兄さん！そのお茶頂戴！」

まさかそこまで慌てるとは思わなかったリアが慌ててお茶を購入。それをロイドに差し出す。それを一気に飲み干していた。

「はぁ、はぁ…ふぅ…」

「えと…大丈夫？」

「…何とか」

と言うロイドの顔が少し赤い。それを見て悪戯っぽく笑う。

「顔赤いよ？どうしたのかな～何を考えたのかな～ほれほれ、お姉さんに言ってみ？可愛い女の子と間接キスできて嬉しいとかさ」

「あ、え、あ…と、とにかく！次は旧市街だっけ？さっそく行ってみようか！」

「……ま、いいわ。それじゃあお願い」

顔をそむけ、背中を見せてさっさと歩きだしたロイドをリアはにやにやしながら追った。

第二話　あいさつとか墓参りとか

結局のところ新住居は旧市街にあるマンションの小さな部屋に落ち着いた。最後の最後までロイドは治安が悪いからと心配していたものの、安いし上に特に不満があるわけでもない部屋だったのでここに決めた。というか一般人が彼女を襲うこと＝死亡グラフである。いや冗談ではなく。

「ありがと、ロイド。助かったわ」
「いや、これも仕事だからね。困ったことがあればまた連絡してくれ」
「うん。了解。遊撃士よりも早くした方がいい？」
「ははは……」

と、最後に苦笑いを浮かべながらロイドは去って行った。さて。

「どうしよっかなー…」

まぁ、ここクロスベルに来たのはただ単にリアが所属している結社で結構大きな一件がリベールで少し前に終わったのだ。ずっと自分は裏方で表舞台には一切出なかったけど。そしてしばらく暇でどうせ行きたいところもないし故郷に帰るかなと思っただけであり、しばらくはここに滞在するつもりだ。と、思いながら安物の部屋ゆえに別にふかふかであるわけでもないベッドにダイブする。さて…どうしようか…と、脳内でやるべきことというワードで脳内検索をかける。しかしそれで出てきたのは案外少なかった。ま、とりあえず…

「…行った方がいいわよね」

まだ一度も行ってないしな…などと思いながらベッドから起き上がる。その前にどこかで花買ってこないと…などと簡単な予定を立てる。

「ついでにお隣さんにあいさつでもしてこよっかな」

礼儀は大事だよね、うん。

リベールを大混乱に陥れた犯罪組織の執行者とは思えないことを呟きながらリアはベットから体を起こした。

「いなかった…」

お隣さんは留守にしてた。噂では気立てのいい若い娘さん。巨乳。ずっとどこかに出かけていて家にいることは少ない。らしい。仕方ないので出直してくることにしよう。それでも他の何人かの人間には挨拶してきたのだが。いまどき礼儀正しい子だと穏やかなおばあさんに褒められた。うん。褒められると結構うれしいものがある。

「♪〜〜」

と、少しだけ機嫌よくマンションのドアを開き外に出ると…

「てめぇ！サーベルパイパーなめんじゃねえぞゴラ！！」

「っふ…これだから野蛮人は…」

今にも喧嘩をおっぱじめそうな二つの集団があった。片方は赤いジャージ。もう片方は青いフードつきのジャージ。

「平和ねぇ…」

かなり一般人よりかけ離れた感想を漏らしつつその集団を避けながら歩き出す。自分から厄介ごとに巻き込まれる理由はない。

と、そんな時。

「やぁ、久しぶりだね」

「？」

そんなリアに涼しげな男の声がかかる。こんなところに知り合いがいるはずが…と思いながら後ろを向く。そこには青いジャージの集団を遠目に見ていたらしき涼しげな男が…

「っぶ…くっくくはははは！！！！」

ツボに入った。

「いきなり笑うっていうのはなかなか失礼じゃないかい？」

「ご、ごめ…ぷっくく…い、いやだって…っぷ…ははは…っ…ワ、ワジく…っぷくく…な、何それ…に、似合いす…ふふ…くくく」

そこに立っていたのは身喰らう蛇の天敵。永遠のライバル？ナルトとサスケ？いやこれは違うか…まぁ、それはいいとして、星杯騎士団の守護騎士とよばれる結構なお偉いさん。ワジだった。
　ツボに入った理由。それは服装にあった。似合わないわけじゃない。むしろ似合いすぎてた。普段と違ってなんかきっちりした服じゃない、腹チラしているというイケメン以外の男が着るには危険な服だというのに。おっそろしいくらいに似合ってた。それが逆にツボに…

「やれやれ…一応僕らは敵同士のはずなんだけどね」
「まぁ、細かいことは気にし…ふふ…っくく、ははは」

やばい。これ普段ならシリアスでないようなシチュエーションなのに。まさかこれも作戦！？こうやって笑わせて戦えなくする気！？…んなわけないか。アホらし。

「ぜぇ…ぜぇ…ふぅ…よし。落ちついた。改めて久しぶりね。ワジ君」
「そうだね。あれ、少し身長も伸びた？」
「うーん…どうだろ。こういうのって自分ではわからないしね…あ、アッパスもおひさー」

友好的にあいさつしたのに微妙に殺気を出しながら戦闘態勢を取られた。あいさつはしっかりしないとダメだよ。人間第一印象っていうのはものすごい大事なんだから。いや初対面じゃないけど。

「ま、いっか…それはそれとして。こんなところでなにしてるのよ？」
「ふふ…今の僕は『テスタメンツ』っていう不良のヘッドだよ」
「どっちの？」

「青い方」

ワジが指さしたほうを見る。

「各員！聖戦の準備だ！」

聖戦って…

「神父さんが何やってるのよ…罰当たりじゃない？」

「ふふ…まぁ、いいじゃない。それで、君は何しに来たんだい」

「微妙にはぐらかされた気はするのだけど…ま、いいわ。大したことじゃないしね。ただの里帰り」

「…っぷ、アハハハハハハ！！！！」

今度はワジがツボった。

「ふふ…いやいや、執行者が里帰りって…なかなか面白いジョークだね」

「うん。これなかなか腹立つね。殴っていい？つか殴るぞゴラ」

「お互いさまじゃないか」

「…それもそうね。ま、ここであなたを殺したとしても大して得しないし」

真顔で物騒なことを言うリアに対しアッパスは警戒を強める。というかアッパスの反応が普通なのであって、何度か本気で殺しあったこともあるこの二人が和やかに談笑しているほうがおかしい。

「ま、そういうわけでさ。ここはお互いに知らぬふりしようよ。こんなところでそんな不良のヘッドなんかしてるってことはなんか訳ありなんでしょ。……そういえばここの教区長ってあなたたちの事

嫌いだったけどそれと関係あるのかしら？」
「ふふ、さすがは『表裏比興』鋭いね」
「それで？」
「いいよ。僕だってこんなところでいきなり殺り合いたくはない」
「ふふ…そっか。それじゃあ、今からただのご近所さんになるわけね。よろしく」

リアは和やかに笑みを浮かべる。友好的でどこか愛想笑いにもとれる普通の笑み。

普通としか表現できない、適度に不自然なところのある笑み。

それを見てワジは言う。内心では警戒しながらそれをおくびにも出さずに愛想笑いを浮かべる。

「フフ、こちらこそ」

「びっくりした…」

まさかあんなところでワジに合うとは思わなかった。本気でなんでいるの？とはいえ考えて判断できるほどに情報も集まっていないので一旦その思考は打ち切る。まぁ、一応整理はしておこう。
まず、星杯騎士団とは？から説明しようかと思う。誰にかって？おいおい、野暮なこと聞くなよ。そこは流すのがお約束だろ、ジョニー。
まず前提としてアーティファクトと言う大昔に作られた古代遺産と言うものがある。それは物によって効果は違うもののものすっごい力を持っている。そんなものを「一般人が持っていいもんじゃねえんだよゴラ！だから俺らによこせや。なに、素直に渡せば痛い目みずにすむぜ？」みたいな事をやっている組織だ。ちょっと乱暴な言いようだがあながち間違ってはないと思う。
まぁ、言い分も分かるんだけどね。確かに誰かがしなくちゃいけないことではあると思う。

そんな組織と何故敵対しているかと言えばだ。

まぁ、アーティファクトを保持してるんだよね。『身喰らう蛇』って。というか星杯騎士団とは別で自分たちの目的のために使うためだから、星杯騎士団とは真っ向から対立するような関係になってしまう。私利私欲のために使う人間からアーティファクトを没収するための星杯騎士団と、私利私欲のためにアーティファクトを集める結社。対立しない方がおかしい。
と、そんな関係でワジを含め守護騎士とは数回殺りあった。全部適当に逃げたけど。

以上。説明を終わります。

「ケビンじゃないのはよかったけどさぁ」

と、呟きながら、彼女は教会の敷地内にある墓場に佇んでいた。…うん。星杯騎士団のクロスベル支部ともいえるような場所にだ。まぁ、ここのお偉いさんは星杯騎士団のことを嫌ってるし何とかなるだろう。
そんなリアの手には三つの花が握られておりそれぞれ白、青、黄となっている。

「…うろ覚えでしかないけど…あってるかな」

クロスベルでの風習で墓に沿える花はこの三色の花だと決まっていた。…たぶん…きっと…おそらく…会ってるといいな…
だんだん自信がなくなってきたが間違っていたとしても出直すのは面倒だったので気にしないことにした。気にしたら負けという奴だ。たぶん嘘だ。
そんなくだらない自分の思考にリアは苦笑を浮かべつつ、改めて目の前の光景を眺める。彼女の前にはたくさんの墓石が視界いっぱいに広がっていた。

「えーと…順番に見ていくしかないわね…」

約十年ぶりに来た場所なので忘れていたり、いくつか新しい墓石が建てられていたりと目的の場所がわからない。幸い時間はタップリあるので一つずつ順番に石に刻まれた文字を読んでいく。
そして半分くらい確認したころだろうか。

「見つけた…」

そこには『セレナ・ルアルディ　ここに眠る』とだけ書かれていた。持ってきていた花をそっと添える。

「久しぶり、お姉ちゃん。亡くなってから十年間。一度もこれなくてごめんなさい」

もう、涙が出てくることはない。長い時間が経ったから。風が吹き、リアの純白の髪が風にもてあそばれる。

「いろいろあったんだよ。ゼムリア大陸の全国各地を回ったりしてね。なんというか…ほんと国によって雰囲気って違うんだね。同じ人間なのに…驚いたよ」

そんなどうでもいい話。しかしそんな言葉にも返事はない。当たり前だ。これはただの大きな石なのだから。そんなの…分かってる。分かってるんだ。

しばらくの間じっと墓石を見つめる。

……

……

……

……

「なんで…お姉ちゃんだったの…？」

どのぐらいの時が立っただろうか。リアは無意識にぽつりとつぶやく。

「世の中お姉ちゃんよりもダメで、くだらなくて、生きている価値もないような糞みたいな人間がたくさんいるのに。なんでそんな奴らじゃなくてお姉ちゃんなの？なんで死んじゃったの？お姉ちゃんが何かしたの？何か悪いとをしたの…？」

今まで一度も吐き出すことのなかった思い。

すべて吐き出す。

そして、自分のしゃべっていることに可笑しさを覚えた。今の自分はその生きている価値もないような糞みたいな人間の一人なのに。

「もしもお姉ちゃんが生きてて…そして今の自分を見たら…叱ってくれた？…怒ってくれた？…だったら…いいな」

それは自分を愛してくれてる証明でもあるから。でも、その答えはもうわからない。もう本人はいないのだから。

そして幾分落ち着いてくると、馬鹿らしい…と自分の事を鼻で笑う。何がしたかったんだろう私は。

「…バイバイ。また来るから。今まで来れなかった分。たくさん、たくさん」

そういって。その場を後にした。

第三話　ちょい伏線と星見の塔へ

クロスベルのどこかにある一つの部屋。そこな中に二人の人間がいる。
両者二人とも全身を覆う黒衣のローブを身に着け、動物をかたどった仮面をかぶっているので顔はおろか性別や年すらもわからない。

「隊長。報告に上がりました」
「どうだった」

隊長と呼ばれた人間に対し、おそらく部下なのであろう人間は、尊敬の念を込めた眼差しを向け報告を始める。
それは、様々な情報だった。ルパーチェ商会の事、黒船（ヘイユエ）の事という裏の情報から、遊撃士や警察への市民の目。そんな真面目な報告に交じっておいしい料理の店とか言うよく分からない物まで。統一性のないもの。
共通点は一つ。クロスベルでの事だと言うことだ。
　そして港湾区のラーメン屋はうまいという報告を最後に従のほうは口を閉じた。

「聞けば聞くほど歪な場所だな…」
「……え？おいしいラーメンの店を聞いてなんでそんな感想？」
「馬鹿者。今はシリアスパートだぞ。黙ってろ」
「…すいません」

それだけ言って両者共口を閉じる。そしてその情報の分析というのは全くやらなかった。
彼らは理解していた。自分たちは主の手足。命令された以上の働きはしないし、そんなことをしても成果を上げることなどできない。

動くのは俺たち。どう動かすかを考え、利用するのが主だった。
「…最後に直接は関係ないのですが、一つ気になることが」
「なんだ？」
「星見の塔。及び月の僧院と呼ばれる場所で上位三属性が働いているようです」
「なに…？」
上位三属性と呼ばれるのは空・時・幻の三属性の事だ。
「具体的には？」
「まだ詳しいことはわかっていませんが、そこに出没する魔獣に対するアーツの効き方が異常だということです」
その確かに不可思議な報告に隊長と呼ばれた男は静かに数秒間黙考する。
「主は、おそらく何人かを調査に向かわせようと指示するだろう。星見の塔には私が行こう。月の僧院とやらには三人、いけそうな者に準備させるように。編成は任せる。以上だ。下がれ」
「っは！」
そう返事をし部下と思わしき男は半透明になり虚空に消える。そんな不可思議なものを見ても隊長はいつもの事だとでもいうように平然としている。
「魔都クロスベル。なかなかお似合いな名前じゃないか」
そう無感情に最後に呟き、黒衣の男も虚空へと消えた。

時と場所は変わり。

「だから私じゃないって言ってるでしょ。冤罪だぞー…訴えてやる！」

「それじゃあ、あなた以外に誰がいるんですか？」

「知らないわよ。たまたまタイミングが悪かっただけよ」

そんな会話をしているのは二人の女性。片方はリア。もう片方は警備隊の制服を着た女性だった。名をノエルと言うらしい。

そんでもってここは星見の塔と呼ばれる場所の入り口であり、入り口に立てられていたバリケードは完全に粉砕されている。

「だから、私がここに来たのはただの興味だって言ってるでしょ。来たら壊れてたのでラッキーってことで入っただけだって、ね？納得してよ」

「そんなウソ信じられるわけないじゃないですか。それ以前にここは一般人立ち入り禁止です」

「ほらほら、そんな厳つい顔しないでさ、もっと笑って笑って。しかめっ面でいるのは損だよ？」

「誰のせいだと思ってるんですか！」

「それは永遠のミステリー。少なくとも私ではないわね」

わけのわからないことを言うリアだった。
そもそもどうしてこうなったかと言えばだ。今日は墓参りに行った翌日。リアは、ちょっと気になることを聞いたのと、ただ単に暇だったこともありこの中を探索してみようという気になったので来てみたら、入り口をふさいでいたのであろうバリケードが粉々になっていた。
常人なら『なんでだ？』みたいに多少疑問に思うであろうこの状態を見たリアは「ラッキー♪」などと言う軽い感想を抱きつつ中に入ろうとしたら…

なんかいるのね。後ろから装甲車が走ってきてるのね。しかもなんかそこの女の子止まりなさいとかスピーカーで言われるのね。しかもこの場には壊れたバリケードと、中に入ろうとしている私がいる。

そんで「バリケードを壊して一般人の立ち入り禁止区画入ろうとしている不審者」と言うふうに勘違いされて今職務質問を受けているといったところだ。というか不法侵入自体は事実だったりする。

そんな感じでかれこれ十分ほど不毛な言い争いをしたころだろうか。そんな時に第三者の声がかかる。

「どうしたんだ？曹長」
「あ、皆さん。お久しぶりです」
「あれ、ロイド？どしたの」

そちらを見るとロイドを筆頭とした四人グループがいた。知ってるのはロイドだけだけど。昨日言ってた支援課のメンバーだろうか？

「ああ、誰かと思えばリアか。昨日は情報ありがとう。助かったよ」
「いや、ただの噂話だし、お礼を言われるほどじゃないわよ」
「なんだロイド。この可愛い子と知り合いか？」

そういうのは赤毛のチャランポランそうな男。それとロイドのほかには育ちのよさそうな同年代の女性。そして…自分より年下の女の子。

青というには少し薄い水色の髪。

ぺったんこな俎板のような胸。

どこか冷めたような印象を受ける整った顔立ち。

さほど高くない身長。

「抱きしめていい！？」
「何言ってるんですか…」

その女の子を見た瞬間にリアの目が変わる。アニメ的に例えれば星になった感じ。リアは素早く女の子の背後を取り、いきなり抱きしめ始めた。周囲はドン引きである。

と言うかドン引きしないような人間がいるだろうか？初対面の幼女といってもさほど間違いではない女の子に対して、鼻息荒くして、迫り、いきなりを抱きしめる…これがもし中年のおっさんでだったら確実にアウトだ。

女に生まれてよかった！

今この時ほど、彼女が女として生まれてきたことに感謝したことはないだろう。

「おぉ…レンちゃんと十分張り合える抱き心地…」

「離してほしいのですが…」

そんな普通の人間なら慌てる…というか軽く身の危険を感じるような状態でもその女の子はクールだった。冷静にその拘束を解こうとする。そんな抵抗を感じるとリアは素直に離れて行った。

「ケチ」

「初対面の方ですよね？」

ぶーっと不満そうな表情を向けるリアに女の子は南極の氷びっくりの冷たさを誇るジト目で答える。クスン…何よ…ちょっとしたスキンシップじゃないの…

「ロイドさん。この方は？」

小さな女の子が唯一リアを知っているロイドに問いかけ、ロイドは昨日町案内をした事を説明する。そしてリアには、この人たちが警察の同僚だと説明した。

「ティオ・ブラトーです」

「ティオ…？」

復活したリアがそう名乗った小さな女の子…ティオの顔をまじまじと見る。可愛すぎて鼻血でそ…じゃなかった。…あの時の…？

その事に関しては、今は関係ないので一旦思考の隅へと追いやるとして、ほかの二人もすごいメンツだ。
赤毛でしかも苗字がオルランドの男。あれと同じ赤毛だし、ほぼ間違いなく、あの化け物の息子さんだろう。…あれを一時期利用したことあったけどマジで化け物だよ…その父親の弟もだけど。
それともう一人のマクダエルという名字の女性。たぶん市長の娘さんだろう。あの市長さんひげが立派だよね！
リアも端的に最低限の自己紹介を済ます。

「と、それいいとして…曹長とリアはどうしたんだ？なんか険悪な雰囲気だったけど…」
「冤罪をかぶせられそうになってる。ほら、ロイド達警察の出番よ！いや、それ以前に男ならか弱い美少女が困ってたら助けてあげないと！」
「この人がバリケードを壊して侵入しようとしてたので…」
「だから、壊してないって…」
「ああ、ほらほらリアも落ち着いて。俺たちにも分かるように説明してくれ」

そんなロイドの声にリアは何度か深呼吸をしてから、ノエルとともに説明をし始めた。

〜事情説明なう〜

「ねぇ…それって…」
「うん…俺もたぶんリアじゃないと思う」
「どういうことですか？」

育ちのよさそうな巨乳…じゃなかった女性…エリィとロイドがそういう。ノエルがなぜかと聞くと、ロイドはその事を説明しはじめる。

?イリア・ブラディエという大スターに銀と名乗る人物が不吉な手紙を送りつけ、それを支援課で調査することに。

?そしていろいろあって、今日の朝『銀』から挑戦状?みたいなのが届き色々なところを回った結果今ここで特務支援課を待ち構えているということが分かったらしい

?そんでもってたぶんそっちが原因じゃね?

てな感じの内容だった。それを聞いたノエルは特に疑うこともなく、リアを申し訳なさそうに見る。

「そうですか…えと、リアさん。すいませんでした」

「あ、いいよいいよ。女の子だし。それじゃあ、私は行くわね」

と極めて自然な感じで背を向けるリアをそのまま見送り、さて、俺たちも行くか!ってな空気になったところで…

「待った」

何か違和感に気づいたロイドが止めた。

「んー…どうかした?」

「バリケードを壊したのが君じゃないとはいえここは一般人立ち入り禁止だ」

「えー…いいじゃん、別に」

「ダメだ。危ないだろ」

危ないのはリアではない。襲った魔物の方である。
「大丈夫だって、それなりに戦えるから。自分で言うのもなんだけど結構強いよ」
「さっきか弱い美少女が何とか言ってなかったか？」
「ええい！人の上げ足ばかりとって！これだから若いのは…」
「いやいや…」

そんな適当な軽口をたたきながらリアは太ももにつけているホルスターと腰につけている鞘からから愛用の拳銃と長剣を取り出す。長剣は黒色。もう片方の拳銃は白で統一されている。しかし、白い拳銃の銃身の下にはただの拳銃にあるはずのない刃が仕込まれており、日光を反射してキレイに光っていた。

「拳銃…？」
「いや、銃剣じゃねえか？」
「そ、ランドル…ランディさん正解。これとアーツと体術が得意かな。まぁ、ぶっちゃけ器用貧乏」
あっぶねぇ…本名で呼ぶところだった…その銃剣と長剣をしまいながら改めてロイドを見る。
「というわけで。自分の身ぐらいは守れるから大丈夫！」
「いや、だから…魔獣だけじゃなくて銀って言う伝説の凶手も待ち構えてるかもしれないだぞ？」
そのまま長時間不毛な進展のない言い争いを続け…
「はぁ…分かったよ。ただし危険だと判断したらすぐに出てもらう

ぞ！」

「ＯＫＯＫ。それじゃあよろしくね」

ロイドが根負けした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2726z/

狂った少女はただ笑う

2011年12月11日12時50分発行